



マラナ・ター主の御国が来ますように……



住吉教会守護の聖人

聖パウロ三木

- 武士の子として摂津に生まれる。
- 受洗(5才), イエズス会に入会(22才)。
- 豊臣秀吉の禁教令により大阪で捕えられる。
- 1597年2月5日, 長崎西坂の丘で他の25人と共に十字架刑に処せられる。
- 1862年6月8日教皇ピオ9世によって, ローマにて列聖さる。



▲1936年撮影：メルシェ神父を中心に，落成した最初の聖堂前で記念撮影。みんなの表情には大きな充足感，自信と決意がみなぎっている。この人々が住吉教会の基(もと)を築いた。

▼1985年，御復活の大祝日：庭を埋めつくす現在のすみよしの家族



すみよし教会の顔



▲1961年撮影：現聖堂建築直後の全景。三木館はまだ見えず、北東の角には伝道士宅が建っている。それぞれの建物が小じんまりと見える。

▼現在の全景



教会全景



▲1956年撮影：この道はかつて、パウロ三木はじめ日本26聖人が、京都から長崎の処刑場へ引き回される時通った道と言われている。現聖堂建築前の風景。この頃、仮聖堂も台風で破壊され、ミサは幼稚園の教室で行なわれていた。

▼現在の正門周辺



パウロ三木の歩いた道

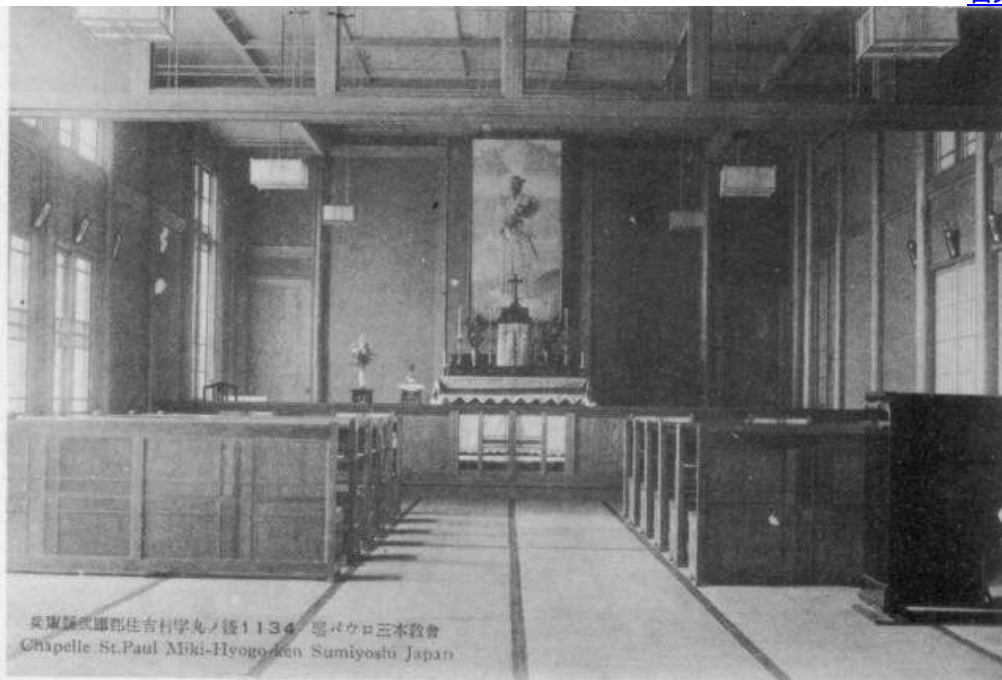


▲1936年撮影：屋根も窓も扉也和風で、内部も畳敷きだった。現聖堂と比べてみると、建築様式の差より、親しみ易さを重んじた雰囲気的な共通点が注目される。そのあたりにもパリ・ミッション会の司牧的配慮がうかがえる。

▼現在の聖堂



聖 堂



兵庫縣武庫郡住吉科学丸ノ鏡1134 聖パウロ三本教會
Chapelle St. Paul Miki-Hyogo Ken Sumiyoshi Japan

▲1936年撮影：この頃のミサでは、司祭と参列者は共に祭壇に向っていたので、構造が今とは少し異っている。中央に若い武士姿のパウロ三木の絵がかけられているのが面白い。

▼現在の祭壇



祭 壇 周 辺



▲1935年撮影：御影時代の貴重な写真。ヒゲをたくわえた若々しいメルシェ神父の清々しい顔が、純和風庭園の木立ちに囲まれて光っている。晴れ姿の印象は、変っても、子供たちのかしこまった表情は今と変わらない。

▼1972年撮影：子供たちの両側、向って左は飯島神父、右は池田雄一神父。



初 聖 体 の 日



▲1950年撮影：終戦後間もなく伝道師和田実師が帰天。転出される未亡人マリアさん(後列右端)を見送るため集まった子供たちとビロー神父(左)、デラー神父(右)。

▼Vサイン、数年前の遠足 表情の屈託のなさが印象的。星の園幼稚園の先生たちも一緒！



子 供 た ち



▲1954年撮影：第1回バザー風景。かいがいしく働く婦人達の姿は今も昔も変わらない。初代教会でもこんな光景が見られたのかもしれない。変化するの文化や風俗、又、時代によって異った生活感情がকাশ出す雰囲気である。

▼最近のバザー風景



バザー風景



▲1937年撮影：夕涼みでもしているのだろうか、司祭館前の石段にしゃがみこんだメルシェ神父と共に歓談のひとつとき。大陸での戦争が激化しつつあった時代背景を思えば、黒いスータンの外人神父とゆかた姿の信者達がかもし出すなごやかな雰囲気は、砂漠のオアシスのようにも思われる。

▼数年前の遠足でのスナップ：稲田シンプサマの楽しそうな顔！



神 父 様 を 囲 ん で

教会八景



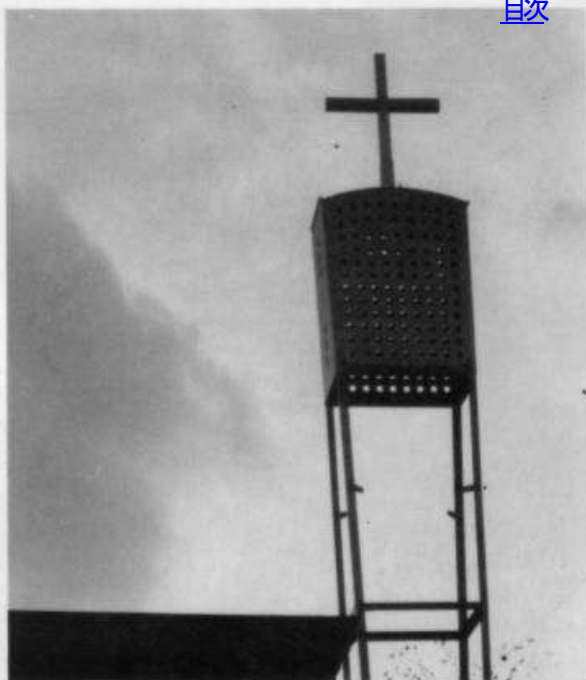
▲洗 礼 盤

10世紀頃まで、洗礼の時には全身を水に浸した。全身全霊を清めるという意味を記憶するため、今の教会にも置かれている。



▲マリア像

星の園幼稚園の園児たちをお守り下さいという願いをこめて昭和39年に立てられた。



▲塔と十字架

道を行く人々もこの十字架を仰いで、ここが教会であることを知る。



▲聖 櫃

主の食卓を囲む私達は、主御自身の生命をいただいている。私達の深い交わりと一致は、聖櫃のイエズスを共に受け入れ、その生命を共に生きる事によって達成される。



▲祭壇の十字架

この素朴な味わいのある十字架は、「小さな兄弟会」修道会の精神的な生みの親である現代フランスの聖者、シャルル・ド・フコーの遺品を元にして、戦後、ペロー神父が日本で作らせた。



▲ルルド

聖母マリアの出現以来、フランスのルルドは現在でも世界有数の巡礼地である。祈りと黙想のため、各地の教会にルルドが作られるようになった。当教会のルルドは昭和27年に作られた。



▲納骨堂

昭和50年に建てられた。当教会ゆかりの多くの人々の遺骨が安置されている。



▲司祭館玄館

司祭館は昭和11年に建てられた。当時建てられて現在残っているのはこの建物だけだが、石段、柱などよく見ると、最近の建物にない独特の味わいがある。

目 次

- [写真集](#)
- [メッセージ](#) (大阪教区大司教) 安田久雄
- [ごあいさつ](#) (主 任 司 祭) 松本武三
- 祝辞
 - [50周年におもう](#) (元主任司祭) 稲田 豊
 - [懐古](#) (元主任司祭) 池田 実
 - [宣教師の幼児時代](#) (元助任司祭) ミッシェル・コーナン
 - [住吉教会50周年に感謝](#) (元助任司祭) 池田雄一
- 年表
- 歴代司祭のプロフィール
- [布告文](#)
- [激動の初期](#) 1935～1945 (二・二六事件から終戦まで)
- 寄稿
 - [第三代ビロース神父さまのことなど](#) (橋本教会主任司祭) 西村良次
 - なつかしい方々 ・ 28年間の住吉 ・ 昔ばなし ・ 不思議な縁 ・ 住吉教会と私の25年
 - 年輪 ・ その5年間 ・ 星の園幼稚園のはじまり ・ 聖堂建設のこと ・ モラ神父様と一緒に
 - ユーモアとヒューマニティーにひかれて ・ 俳句「花開く」
- 特別インタビュー『風雪50年この人に聞く』
- 寄稿
 - JOC華やかなりし頃 ・ JBDR時代 ・ ミサゴ ・ 青年会と少年キャンプ ・ 牧谷巡礼14年
- お別れ対談 稲田豊神父・松浦信行神父に聞く
- 随想
 - 私とキリスト教 ・ ミサ典礼の移り変わり「ラテン語から日本語へ」 ・ 教皇様をお迎えして
 - 「道ありき」から ・ Let it be ・ 私の好きな住吉教会 ・ 聖書研究会20年の随想
 - ともに歌いましょう ・ 結婚互助会から ・ 福祉委員会の活動
- 座談会 教会活動の現状
- 50周年記念式典から[「百周年に向かって」](#)
 - [時はとどまらず](#)
- 資料
- [編集後記](#)

*小文字は当ホームページに掲載されていない記事

メ ッ セ ー ジ

住吉教会創立 50 年を祝して

大阪教区大司教

パウロ 安田 久雄



[目次](#)

私たち大阪教区の司祭が心から敬愛する故メルシェ神父様が、当時のカスチニエ司教様の命によって阪神御影駅の近くに家を求めて移られたのが、満 50 年前の昭和 10 年 5 月 5 日でありました。翌年 12 月 13 日には現在地にて献堂式が行なわれ、メルシェ神父様を初代主任司祭として、名実ともに住吉の教会が発足いたしました。

皆さんの住吉教会は、日本 26 聖殉教者の 1 人聖パウロ三木を守護者として奉獻されています。皆さんもご存知のように、この聖人は豊臣秀吉の禁教令の下での宣教活動のかどで捕えられ、西国街道を徒歩で、住吉教会のすぐ傍らを通して長崎までひかれてゆき、十字架にはりつけにされて殉教しました。

住吉教会も又、福音の灯を高く掲げて進む道程で、守護者のように、外からの多くの苦難に耐えねばなりませんでした。昭和 13 年 7 月 5 日の集中豪雨による山津波は、教会周辺の地形を一変させてしまう恐ろしいものでした。更に第二次世界大戦の敗戦直前、昭和 20 年 8 月 6 日の空襲で、聖堂は 20 発の焼夷弾をうけて燃え落ちました。また、戦後の福音宣教の力の源泉であった臨時聖堂も、昭和 28 年 9 月 23 日の台風により殆んど壊滅したのであります。守護者の殉教と歩みをとともにすることが、外面的なできごとに於いても、どんなに厳しい道であるかを示すかのようであります。

しかしこのような外からの苦しみは、一方では神様の恵みによる内面の喜びを生み出したのであります。戦時中のキリスト教圧迫からくる苦難をも、皆さんはよく耐え抜かれました。それは戦後の教会の大きな発展につながったのであります。歴代の神父様方を中心とした多くの信者の皆さんの信仰と熱意が、聖霊の導きによる心の一致を生みだし、すばらしい宣教的な共同体として、住吉の教会を育てました。神様の眼からすれば、真の価値は物質的な立派さや豊かさではなく、人びとの救いのために、主キリストをめざしてともに進もうと、神と人への愛に動かされて人に尽くすところに見出されるのです。そしてこの点に於いて住吉の教会は、豊かな祝福を頂いてきました。

日本の司教団は、次のように呼びかけています。先ず私たち自身が福音の呼びかけに従った生き方をしよう。そして私たち信者の生活態度や言葉を通して、一人でも多くの人に福音を知ってもらい、信仰の喜びへと伴なおう。こうして日本の社会そのものを、福音の力で内から変革し、神様の導きのもとに新しい生命に生きるものにしよう、というのであります。そしてこれこそ、聖パウロ三木が生命をかけて遂行したところなのです。

住吉の教会の 50 年の歴史は、守護者のこの足跡を忠実にたどって来ました。これから新しい世紀へ向けての次の 50 年を、一層の熱意と実行力を以て、聖パウロ三木に励まされて主キリストとともに進み、大阪教区における福音宣布の先頭に立つ共同体となってくださいよう、祈りをこめてお願いいたします。

ご あ い さ つ

[目次](#)

新たな旅立ち

住吉教会主任司祭

ラファエル 松本 武三



"主よ、あなたの住まわれる家と栄光のとどまるところを愛す"(詩 26-8)

住吉の皆さん、50年の神の導きに感謝し、この言葉を大切に、新たな旅立ちをはじめましょう。

メルシェ神父様の清さ、デラー神父様のあたたかさ、ペロー神父様の情熱といったパリーミッション会の信仰の魂で生まれたこの教会に、いつも神さまがおられ、聖堂で待っていて下さるというのは、何とすばらしい恵みでしょう。だから、いつもこの聖堂に集い、共に祈り、キリストの体をいただき、み心に育まれる子供として、『神さま大好き』と叫ぶ輪を広め深めましょう。

"老シメオンは神殿で幼子イエズスを見い出す" (ルカ 2-28)

私達の教会は、すてきな年配の方がたくさんおられます。どうか深い祈りでもって、子供たちを見守り、イエズスの声に耳を傾ける信徒に育てて下さいますように。

"あわれみは、主をおそれ、敬う者に及びます" (ルカ 1-50)

教会はいろいろな会があって、何かと行事があり、忙しいものです。そして、時々心が亡びます。この記念ミサを通して、自分の心と教会の姿を見つめ直し、汚れを落とし、神さまが喜んで下さる道を歩めるように、聖霊の力を求めましょう。

"私は今、あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする。神から委ねられた使命に従って、私は教会の奉仕者となった。それは神のみ言葉、世の代々隠されていた奥義を全うすることである。それは今や聖徒に現わされた。"

(コロサイ 1 の 24-26)

デラー神父様が亡くなられたとき、作られたカードに刻まれたことばです。そして、私の宝物です。社会に対しても、教会の皆さんに対しても、欠けた所の多い私ですが、歴代の神父様方の心を大切に、教会を守って行きたいと思います。

住吉教会の皆さん、この教会のために、信仰と愛をもって関わって下さったすべての司祭、修道者、信者の方々に感謝しつつ、私達一人一人が小さい力を合わせ、キリストの神秘体として生きることができるよう"きょう"安田大司教様の手を通して、祝福をいただき、喜んで、元気に歩んで行きましょう。

祝 辞

[目次](#)

50周年におもう

元主任司祭 稲田 豊神父

「主が家を建てられないなら、
それを造る者の働きは、空しい。」（詩篇 127-1）

初代主任司祭メルシェ神父様は、私にとって偉大な師でありました。司祭生活に必要なことを、ことばではなく行ないをもって教えてくださいました。師のもっておられた「忠実さ」が、脈々と住吉教会に流れています。

十年前、住吉教会には悲しい出来事がありました。飯島神父様の帰天でした。同時に、私にとっても司祭叙階同期であり、無二の親友でありました。その後任にと田口枢機卿様より任命を受けたのでした。

以来十年間、諸先輩、信徒の皆様の祈りと、ご活躍によって50周年の準備が出来ましたので、本日の喜びを迎えられました。うれしいです。本当に喜んでいます。

ある日のことでした。

「神父さん、私の葬式をお願いしますよ。」

と数人の熟老からお願いを受けました。すがすがしいお顔をしておられました。そうです。私たちは、いつかは、「神の国」で神とともに永遠の交わりに生きるのです。

住吉教会のみなさん、ともに祈り、はげまし合って生きていきましょう。50周年は、みなさんの祝福の年です。海南教会とマリア幼稚園のためにもお祈りください。



懐 古

元主任司祭 池田 実神父

教会創立50周年おめでとうございます。沢山のよき印象を植付けて下さった住吉教会とお別れいたしましてから三つ目の教会で、現在は奉仕させて頂いております。

あちこち移り渡って行った教会では、労をねぎらう過分のお言葉を頂く事がよくあるのですが、私としては、むしろ恥しい思いかよみがえって来るばかりです。当然果すべき働きも充分果し得ず、いやむしろ信徒の皆さんから沢山の霊的賜を頂く仲介をしていただいた事が山ほどあった事が、今思えば実感のもてる懐古であります。私が住吉教会へ参ります以前は、御存じのようにパリーミッション会の神父様方によって繁栄を極めていた教会でしたが、邦人司祭である私が初めて任命されて姿を現して以来、信徒の皆様には教会に於いて違和感を覚えさせ、なじんで頂くまでは随分御苦勞をおかけした事だろうと思います。

時がたつにつれ信仰者である皆様方の寛大な心は、いたわりやわらかく包むという風に接して下さり、私の将来に沢山の精神的、霊的資産を恵んで下さいました。

当時住吉教会にはデビディエール(JBDR)という大学、高校生を中心とする会がありました。毎週楽しいかつ有意義な会を持ち今も強い印象として残っています。教会をあるべき姿に帰そうとするような動きが若者の心をとらえ始めている様に感じました。

又婦入部の方々の信徒使徒職への参加はめざましいものがあり、私のようなノロマな者にとって霊的精神的な場で働こうとする上に必要な小才を刺激して下さい、人とのかわり方へよく導いて下さった事を感謝しています。

50周年といいますと人間と同じく教会も働き盛りという事でしょう。教会はいうまでもなくその建造物を意味していません。教会はキリストを中心とする信徒の共同体です。一番すばらしい永遠の善をねらって前進する信仰兄弟の仕事場です。どうかますます愛と一致、実りの輪を拡げて住吉教会がそこにおかれている理由を実現して下さい。多くのキリストを知らぬ人々が教会を取りまく周辺にもまだまだおられます。それらの人々を招いておられるキリストの心に答えるべく、よき手足となってお働き下さるようお祈り致します。





宣教師の幼児時代

元助任司祭・ミッシェル・コーナン神父

昭和三十七年十一月十一日、日曜日の朝の事であった。デラ神父に御ミサをお願いしたベロ一神父は神戸港まで私を迎えに来て下さったのである。星の園幼稚園の先生二人が新人の姿を見ながら「はい」と「いいえ」という最初の日本語の言葉を教えて下さった事は二十年経った今もまだ記憶に残っているのです。住吉教会は日本の教会に仕える宣教師としての私の生れ故郷なのである。二年間もお世話になった間、芦屋の日本語学校に通っていましたが教会の信徒との温かいおつき合いの内に、日本の習慣とか、日本人の気持などを種々と教えて頂き非常に養成されたのです。しかし一番有難い事は、住吉教会という共同体の信仰の証しを通して私が日本の教会の美しさを発見したのです。レジオ・マリエの方に公教要理の教科書の読み方や、聖歌隊でマリア様に捧げる讃美歌など教えて頂き、良い環境に恵まれて成長してきた私は、いよいよ八月十五日に最初の説教……ふるえ乍ら。被昇天の御ミサのあと、あるおばあちゃまは婦人の方にうっかりと口をすべらしたそうです。

〃若い司祭はとっても熱心に説教したね、でも住吉ではやはり英語を使うよりも日本語の方がよく通じるでしょうね〃…ガクンと…。

日本語学校を卒業して、三十九年のクリスマスを最後に教会で楽しませて頂いたあと十二月二十七日下山手教会の助任司祭として任命されたのです。

それによって淋しくも縁を切ったと思えば又四十四年十月に戻って来たのです。わずか十五ヵ月しか続きませんでしたが、池田実神父の親切な指導のもとに、非常に有意義な期間になったのです。司牧というよりも日本語の勉強の為に来たが、解らない内にJBDRの集会に参加し、ヨハネ黙示録というむずかしい聖書研究にも与って、私の司祭としての心がより一層養成されたのです。

そういうふうにも二回も住吉教会で若い宣教師だった私は、信徒共同体の方々に種々とお世話になって今も感謝して止みません。最初の出会いの印象が深く消えないのです。その幼児時代をふり返ってみますと、滞在中迷惑をかける以外何もなかった私は、現在に至るまで住吉教会の成長を眺めながら、神様に感謝し、又十年間も頑張ってくださった稲田豊神父をはじめ代々の主任司祭とほかの司祭と信徒の方々にごくろうさまと心から申し上げたい次第である。

これからも主の御力と聖霊の御導きとによってより現在の社会に門を開いた活発な教会共同体になりますようにお祈りをし、過去50周年の御祝いの喜びといたします。

住吉教会50周年に感謝

元助任司祭 池田雄一神父

一九四一年四月、ビロー神父様より洗礼を受け、一九七一年四月より一年間助任司祭を務めさせていただいた住吉教会ありがとう。

司祭生活最初の一年でした。初聖体の子供達、住吉教会最後の御ミサは初聖体の日でした。みんな頑張って準備しましたね。君達が手に聖体を受け取った時「アーメン」と答えました。その時、目頭が熱くなりました。

香住のキャンプ大勢で行きました。資金の一部にと、リーダー達とペンキを塗りましたね。聖堂の屋根はほんとうに大きいと思いました。

洗礼第一号もありました。あの赤ちゃん、大きな中学生になりました。

約束をまだ果していませんが忘れていません。貧しい人達の中での司祭職をと、黄色い口ばしで息巻いたのもその頃でした。

今、司祭生活十五年目を東京の空の下で送っています。神学生養成の仕事です。住吉教会に縁ある、和田神父さん、松本錦治神父さん、イエズス会の貝塚神父さん、皆大活躍中です。住吉教会からもっともっと召し出しがあるよう祈っています。

今日の私を育ててくれた住吉教会ありがとう、50年の歴史に感謝。



EVECHE D'OSAKA
MINATO KU, TOMIJIMA CHO,
OSAKA

Osaka le 30 avril 1937

D E C R E T

Après avoir invoqué le Saint Nom de Dieu et demandé l'avis des
Consulteurs Diocésains, Nous décrétons ce qui suit:

I- Le nouveau poste de SUMIYOSHI, situé à l'est de la ville de KOBE,
est érigé en paroisse, et d'après le décret de la S.C. de la Propagande
du 9 décembre 1920, cette paroisse sera assimilée canoniquement à
une quasi paroisse.

II- La paroisse de Sumiyoshi aura comme limite:

au sud: la baie d'Osaka

à l'ouest: le Oishigawa continué par le chemin qui aboutit à Shinhoda
sur la crete du Rokko san.

au nord: la limite sud de l'Arima-gun.

à l'est: la limite ouest du Seido mura depuis la mer au sud, jusqu'à
la limite du chemin de fer Osaka-Kobe, puis cette ligne
elle meme continuée à l'ouest jusqu'à sa rencontre avec le
Tenjogawa, enfin le Tenjogawa continué au nord par le chemin
qui va à Arima-cho

Le Père A. MERCIER, Miss. Apost., qui a fondé ce nouveau poste
commencé dans une maison louée à MIKAGE CHO, et installé définitive-
ment au village de SUMIYOSHI, devient donc Curé de la paroisse de
Sumiyoshi, qui a été mise dès le début sous le patronage du martyr
japonais St. Paul Miki.

Pour faire connaître le présent décret à ses paroissiens, le Curé
de Sumiyoshi devra le lire une fois à la messe du dimanche, ou le
faire afficher pendant 10 jours à l'entrée de la Chapelle Paroissiale.

Fait à Osaka, le 30 Avril 1937

J. B. CASTANIER
Eveque d'Osaka

P.S. Le présent décret devra être conservé aux archives de la
paroisse de Sumiyoshi.

J.B.C.

Au Père A. Mercier, Miss. Apost.
Curé de Sumiyoshi

Pour copie conforme:

(J. Deyrat) Vic.

Sumiyoshi, KOBE, le 20 décembre 1961

1937年4月30日にカスタンニエ司教によって発行されたこの書類は、当教会が正式に大阪教区内の
準小教区として認められたことを布告している。(次ページに訳文)

大阪司教区

大阪市港区富島町 58

大阪 1937 年 4 月 30 日

布告書

神の御名によって、また当教区顧問の方々の御意見を考慮し私達は次のように布告します。

1. 神戸市東部に位置する住吉教会の新しい役務は小教区としての名が与えられます。
すなわち 1920 年 12 月 9 日付の布教聖省の布告によって、この小教区は
教会法による準小教区に相当するものとなります。
2. 住吉小教区はその境界として次の区画を定めます。

南限 大阪湾

西限 六甲山頂の新穂高に至る大石川の線

北限 有馬郡の南の境界線まで

東限 南限を海とし、大阪神戸間の鉄道を北限とする精道村西端。

なおこの線は西方において天井川と接し、さらに天井川は北方において有馬町に至る道路に接続する。

御影町の借家においてこの新しい役務を始め、最終的に住吉村に居住するパリミッシン会のメルシェ神父は、当初日本殉教者聖パウロ三木の保護の許に置かれた住吉教区の主任司祭となります。

この布告文を小教区の信者の皆さんに周知させるために、住吉の主任司祭は主日のミサに際してこれを朗読されるかまたは小教区聖堂の入口に 10 日間これを掲示しなければなりません。

大阪にて 1937 年 4 月 30 日

大阪司教 J.B.カスタニエ

後記 この布告文は住吉小教区の書庫に保管されねばなりません。 J.B.
住吉の主任司祭 パリミッシン会員 メルシェ神父へ

※前ページ布告書の訳文

激動の初期 1935-1945

(二・二六事件から終戦まで)

昭和10年5月5日、住吉天主公教会は、アルフレッド・メルシェ神父によって御影の地にその第一歩がしるされた。

阪神御影駅ちかくの借家に拠点をおいた教会は、翌年の暮れには早くも住吉(現在地)への移転を果たした。が、時代は二・二六事件にあけ、日中戦争から第二次世界大戦へと至る暗雲たれこめる時の渦中であって、教会も云うに及ばず、大きなうねりの中に奔弄されなければならなかった。

しかし、不幸な出来事に見舞われるたびに、人々は自分たちにとって真に大切なもの、守りぬかねばならぬものが何であるかを深く自覚し、試練を祈りの心に転化して主の十字架を心の糧としながら、再び一丸となって立ち上った。

水 害



▼「教会南側畠地ハ泥土ノ海ト化ス。二階ヨリ写ス」当教会第一代伝道士、和田実氏の日記帳より。二階というのは、司祭館の二階であろう。洪水のすさまじさがよく分る。



▲7月15日付朝日新聞阪神版よりの切り抜き。いささかオーバーな表現と大時代的な文体は、今読むと少しくすぐったいようなおかしさを感じさせる。然し、このエピソードを単なる過去の美談で終わらせていないのは、取材した記者が感じた「国境を越えた人類愛の至情」であり、そして若き宣教師モラー神父の言葉「命をすててもよい。あのか弱い婦人達を助けませう」である。

昭和13年7月5日、阪神地方は未曾有の豪雨禍に見舞われた。7月3日、午後6時頃より降りはじめた雨は次第に勢いを増し、4日夜半いったん止むかにみえたが、深更より再び勢いをとりもどし、5日、午前8時より正午までの間に平均41.5ミリの雨量を記録した。そのため、各所の急斜面は崩れ、住吉川は決壊し、堤防をこえてあふれ出した水流はたちまち付近の家屋を濁流の中にのみこんだ。

戦 争



▲戦争がエスカレートするにつれ、官憲は外国人に神経をとがらせ、神父といえども身分証なしでは外出もままならなかった。仏領事の発行したカスタニエ司教の身元証明書。

▼1934年、神戸愛国カトリック少年団発足。ボーイスカウトの前身のような組織だが、少年たちの凜とした表情と「愛国」の文字にいささかの胸の痛みを禁じ得ない。



▼デーラー神父が住吉教会主任司祭として着任するにあたって発行された證明願、及び証明書。



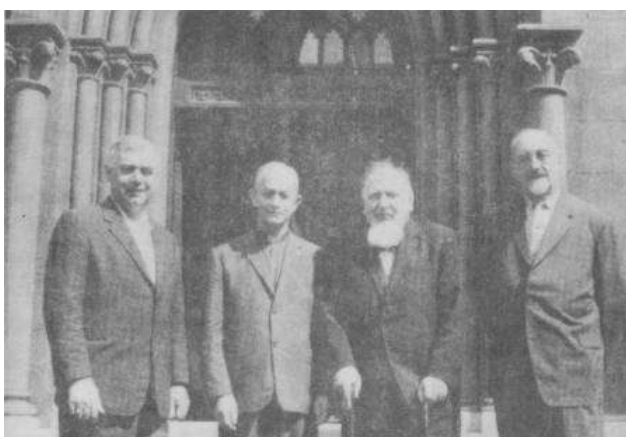
▲教会は宗教的な共同体であるという当り前の事実も、それが事実となるためには認可が必要だった。



▲田口大阪教区長が、カスタニエ司教に対して住吉教会主任司祭となるよう命じた任命書。渡す側、渡される側双方の胸の内は想像に難くない

世界のキリスト教会の歴史は、迫害の歴史をめぐりに語ることはできないが、住吉カトリック教会の50年にわたる歩みの中で、その活動が時の権力によってもっとも制限されたのは、日本が戦時体制を固め、全面的な世界大戦へと突入していく前の四、五年間に集中されている。戦火をまぬがれ、デーラー神父の手によって保存されていたこれらの書類は、教会全体の活動がいかに制限されていたかを如実に物語っている。

パリー^{ミッショ}ン 外国宣教会とその伝道



▲写真左より、ベロー神父、メルシェ神父、デーラー神父、ジュセン神父
(1975年10月9日撮影:於中山手聖堂前)

当教会が、第二次世界大戦直前の困難な時代に誕生し、その後幾多の災害、試練、時代のうねりにも流される事なく今日に至ったのは、初代主任司祭メルシェ師をはじめとして昭和 43 年まで当教会の司牧の任にあたってこられた歴代パリーミッション会の神父様方のミッション魂、宣教に対する燃えるような情熱に負うところ、まことに大であるといわねばなりません。

創立 300 年という輝かしい歴史をもつパリーミッション会は聖フランシスコザベリオに倣って東洋の伝道に専心してきた宣教会であります。その会則綱領を見ますと、まず第一に布教地に行つて、少しでも信者をつくると、その中から初めに司祭を養成します。そしてその土地の司祭によって布教を進め、ますます信者をふやし、教会を建てて、教勢を発展させて行きます。そしてそれらの教会がすべてに独立して行けるようになると、これをその邦入司祭にゆづつて、自分達は又別の布教地に行つて新しい伝道をつづけるのです。そして又、その発展を見極めるとこれを土地の人にゆづつて更に新しい所に行きます。

丁度開拓者の精神と同じです。イエズス様が「行きて万民に教えよ」と言われた言葉通りを今日黙々と実行しているのです。そして故国フランスから多額のお金を送り込んで、惜しみなく建設し、それをなんの代償を求めることなく淡々としてゆづつて、布教地の教化につくされるのです。大阪教区の基礎はこうした尊い遺産にもとづいて発展したわけです。

第三代ビロース神父さまのことなど

西村良次神父

■ 山津波阪神間をおそう

大山津波が六甲山系の麓一帯に襲いかかった翌年1939年(昭14)住吉教会二代目のアンリ・モラ師は香里教会に転任され、その後へ大阪川口からヨゼフ・ビロース師が三代目主任として赴任された。

■ カスタニエ司教の受難

1940年(昭15)には戦時態勢となり全日本の外人司教、教区長様方は邦人とかわり、カスタニエ大阪司教は、その叙階後24年目に川口の司教座を田口新教区長に譲って副司教になり、住吉教会に来て主任も兼ねる事になった。翌年1941年1月29日には舞鶴主任であった私は住吉に呼ばれて、ビロース師と共に助任を務める事になった。

ビロース師は仏国サヴォワ地方の方でスイスとの国境にある世界の公園レマン湖畔のベルネの農家出身であった。師は来日後、津教会で主任を二十五年務め銀祝をすませて後、京都河原町の元副司教オリアンチス神父逝去に伴う司祭移動で、1922年(大11)カスタニエ司教のお膝元で川口主任を20年間続けることになる。

■ ビロース師の伝道

すると程なく1925年(大14)には、大阪府三島郡千提寺村に旧キリシタンの子孫数家族と沢山の遺物が発見されたので、カスタニエ司教は千提寺に伝道所を建設、布教の態勢を整えられ、担当司祭にビロース師を任命、師は川口と掛け持ちとなった。元来ビロース師は教会史に造詣深く、キリシタン史にも師なりに精進しておられたから師は満足であった。ここの旧キリシタンは高山右近の高槻城下の信者の子孫と言えよう。迫害下、司祭なしで、教え方の婦人が口伝で幼児洗礼を授ける慣習が、大正時代まで続いたのだから大したものである。

したがって、師は右近列福の日を待ちわび、毎週水曜日には大きな皮製のカバンを肩にして国鉄茨木駅か、阪急箕面駅から徒歩で千提寺に通い、一泊して翌朝御ミサを捧げて戻るのだが、殆んど毎週のように北野教会の親友ゼレー師を訪ねておられた。

アルプス出身の師だけに山が大好きで箕面、妙見、高山村、茨木に到るここの山々をこよなく愛しておられた。ロザリオを唱えながらテクラ橋、キルス山を歩いては右近を偲び、この地の改宗のために黙祷を捧げ続けた。「高山右近」という小冊子が刊行されている。外にオルガンチノ神父も尊崇していた。師は大阪教区発行の「家庭の友」の編集者でもあって、記事の案は常にこの道を歩きながら練ったのだそうである。

住吉に来られてからも、この伝道は続けられたが、1942年頃から戦時中の事で外人の他府県への外出にはいちいち警察の許可が必要となって来た。「家庭の友」は廃刊となり、師の山行きも回数が少なくなって終にはもう行けなくなってしまった。師の悲しみは大きかった。幸い山の教会には、明治8年に川口で受洗したOさんとその娘、H(伝道婦)さんが留守番をし

ていた。

師は、午前中は聖書と歴史の研究を続け、午後は聖務口祷が終ると老齢にもめげず、雨の日を除いては2時半頃から毎日散策に出かけた。昔の宣教師は午後は家庭訪問する方が多かったから、その名残りであろう。老齢で眼が悪くレンズのような眼鏡をかけておられたが、道は非常によく知っておられた。五時頃帰ると畳の上に正座して30分から1時間位のご聖体訪問をされた。

*

*

*

住吉に私が行ってから、師の部屋が隣りであったため、よく師の部屋を訪ねると歴史や述懐談や経験談に花を咲かせて聴くのは楽しかった。部屋は質素そのものだが額が二枚かかっていた。一枚は霊名の聖ヨゼフがイエズスと聖母に見とられてこの世を去られる御絵で、もう一枚は風光明媚な湖をバックにしたシオン城であった。

師の御自慢は、師の故郷から少し遠いがサレジオの聖フランシスコ生誕地アンネシーがある事、ヌ・アンネシー出身の聖徒の香り高く世を去った可憐の少女アンネ・ド・ギネの列福調査が始まったということであった。

《イミタチオ・クリスチ》は年をとるにつれて読み応えのある不思議な本だと賞讃し、御聖体の祝日の聖務に出てくる聖トマス・アクイナスの詩《ヴェルブム・スペルヌム》(神なるみ言葉)の詩から四行を抜き出されて《神・世界・人間》のすべてがこの中に全部含まれていると感嘆された。

■ 司教さまの死とブスケ神父の殉教

1943年(昭18)3月12日、カスタニエ司教が逝去されるや、全国から司教様、教区長様、神父様方が大勢集って来られ、田口司教様は神戸中山手教会で官憲の眼の光る中、葬儀のミサを盛大に執り行われた。その際、極秘に付されていた、二日前の10日、ブスケ神父が殉教のような死を遂げた事が全国に知れ亘ってしまった。司教様の死後デラ氏が住吉主任となった。

とうとう私にも応召の赤紙が来てしまった。ビロース師は、司祭の数が減少するのを憂えておられた。まだ住吉にいた間に次のような事も言われた。<ヒットラーやムッソリーニのような人はベットの上では死ぬ事はない>……さすがに東条大将の名は出なかった。

■ ビロース師の最後

一九四九年、師は住吉で安らかに逝った。何の目立つ事もなく、なされた山程ある善業をひた隠しにして逝った。

《何をやっても成功せんなあー》と言っておられたが、これは師が最も愛した謙遜徳から出た言葉として受止めた。陰には行届いたお世話をされた和田伝道士さん(和田神父様の厳父)Kさん母娘がいた事ももう知る人は少なくなった事だろう。

千提寺の仮教会は道路拡張でその土地は半分程に減り、それより二丁奥には今日では師の遺志を継ぐかのようにケヌエル師が立派な「愛と光の家」を建設して押寄せる団体、個人の黙想客の霊的指導をしておられる。

百周年にむかって

50周年記念式典

1985年5月5日（日）

わたしはまことのぶどうの木、
わたしの父は園丁である。
父は、わたしにあって実を結ばない枝を
すべて切りとり、
実を結ぶ枝を
さらに豊かに結ばせるために刈りこまれる。
わたしにとどまりなさい。
そうすればわたしも、あなた方にとどまる。
わたしはぶどうの木、
あなた方はその枝である。
わたしがその人の内にいるように
わたしにとどまるなら、
その人は多くの実を結ぶ。
父がわたしを愛されるように
わたしもあなた方を愛した。
わたしの愛にとどまりなさい。

[ヨハネ・15章より抜粋]

安田大司教のおことば

(記念式典中の祝辞)

今日よろこびの日に当り、住吉教会の皆さまと共によろこびを分かちあいたいと思います。

この日に到る基礎をおかれたカスタニエ司教さまはじめ、歴代の神父さま方、シスター方、信者のみなさんの心をこめた、又、心血を注いだご努力の結果をいただいているのでございます。

それは、三位一体の神のおいつくしみによって、私たちが神の子としていただき、復活の生命に与ることが出来るようにしていただいたことに対する心からの感謝をもって、多くの人々に告げ知らせ、分かち合おうとする日々であったと存じます。

それはまた、初代教会において、教会の信者たちが行った努力でありましたし、又、この教会の守護者である日本二十六聖殉教者の一人、聖パウロ三木の歩んだ足跡でもございました。

これからの21世紀へ向けての新しい日々を、次の50年、百周年にむけて今日みなさんは始めようとしておられます。その歩みもまた今日のように、主のいつくしみに対する感謝の心をもって、愛をもって応えるが為に、私たちがいただいているこの復活の生命の恵みのよろこびというものを、一人でも多くの人々に伝えるというところに視点がおかれてこそ、その意義がございます。先ほどのベロー神父さまの熱烈なお説教の中で教えて下さったこともみなそこに集中されています。

住吉の信者のみなさん、今日お集まり、自分の救霊の為ではなく、家族のことだけでなく、住吉小教区のことだけに努力するのではなく、多くの人々の為に、神さまからいただいた恵みを分かち合おうという心を抱いてほしいと思います。

私たちが本当の意味で小さい者であるにもかかわらず、これほどまでにして下さったということを、聖霊の導きの中にふさわしく感じとっていただきたいのであります。

そして、その祈りを通して、同じ小さい者として、現代社会の中で弱い立場におかれて苦しみつづけている人々に対する奉仕などを通して、日本の社会のこのひずんだ姿を福音の力によって少しでも直していく努力をする共同体となって下さることをお願いいたします。

先ごろ日本の司教団が出した、宣教する共同体になろうという呼びかけは、まことにつたないことばではありますが、みなさま方お一人お一人が、これから進むべき道の尺度として下さって、草の根から築き上げて下さってはじめて意味あるものとなりうるのであります。

それは、みなさん方お一人お一人が、意識を新たにし、新しい生活へむかっていくご努力にかかっています。住吉の教会の50周年を祝うに当り、この決意を固めて新しい歩みをはじめることこそ、この教会の為に尽し下さった司祭・修道者・信徒のみなさまのご努力にお応えする道であり、日本におけるカトリック教会が、日本の兄弟たち、又、全世界の人々に奉仕をしようとする唯一の道でございます。

このことを、聖霊なる神がみなさんの心を深く照して、深くそれを心に刻みつけ、それを実行する勇気と確信をお与え下さることを心から祈りつつ、お祝いのことばといたします。

50周年記念式典から

時はとどまらず

玉 井 洋 子



聖堂入口でひざまずいて、入堂前
の祈りを捧げる安田大司教

昭和60年5月5日

復活祭を最後に転任される稲田、松浦両神父をお送りしたあと、新しい主任司祭に松本神父をお迎えするという短時日のめまぐるしい転回のうちにも、スムーズにバトンは渡され、教会活動はあげてこの一点にむけて集中されていった。

午後2時

ベロー神父がみえた。コーナン神父もいらっしゃる。1ヶ月ほどの間にすっかり日焼けしてちょっと痩せられた稲田神父、まだとてもお客様には思えない松浦神父、なつかしい池田(実)神父のお顔もみえる。

そして、パリミッション会から、ペンクレス神父(北須磨)、ポンス神父(鷹取)、イエズス会から、ペニユエラ神父(六甲)、フロレス神父(六甲)。ご受難会から、リチャード神父(売布)、教区司祭の明石神父(下山手)、梅原神父(司教館)。

と、安田大司教と、わが教会の新しい牧者、松本神父が加わった総勢14人の司祭団の入堂を緊張と興奮のうちに迎えた。

司教館の前庭のリラの白い花が散り、植込みのさつきが緋色の花を咲かせはじめ、ただでさえ雨の多い季節に真夏日を思わせるような晴天が一週間ちかくも続き、式典の前日には、続きすぎた後の雨を気づかったが、一夜あけてこの朝、湿気を含んだ風が砂塵をまきあげて時折はげしく吹きつけるが、本格的な雨になるにはしばらく間のある空模様。記念式典のあとには、幼稚園の庭での園遊会が予定されている。



ミサを司式する安田大司教と司祭たち。
手前には、この50年間を象徴する5本の
ローソクが立てられている。

ゴールデンウィークの中日の、日曜日と重った子供の日、聖堂にならべられた300余の椅子席はたちまち満ぱいとなり、立つ人も出る有様。

記念ミサは、安田大司教、ベロー神父、稲田神父の司式によってはじまり、復活節第5主日の典礼にしたがって進められた。

第1朗読には、キリスト者を迫害しようとダマスコへ向うサウロに復活されたキリストがあらわれ、ご自身を啓示される使徒行録の一節が読まれた。

それは、迫害者サウロの回心によって、教会がその数を増していくところだが、住吉教会が50年を節目として新しい一步を踏み出そうとする時に、この部分が読まれたということが私には単なる偶然には思えない。

キリスト教を弘布した廉によって捕えられ、京都から二百十里の道を33日間ひきまわされ、長崎で十字架刑に処せられた聖パウロ三木を守護者にいただくこの教会が、遠い昔、迫害によって流された多くの血によってあがなわれていることを、ふと思い出させられてしまった。

禁教の闇をついてもたらされた信仰の遺産にいま、私たちはあずかっているのだが、パウロ三木の生きた時代からすでに400年ちかく経っている。

続いて、説教に立ったベロー神父は、ヨハネによる福音から、「ぶどうの木」のたとえ話をもとにして神のご計画の遠大さと、愛の深さを熱っぽく説かれた。

——ぶどうの木というのは、実以外には何の役にもたたないものです。しかし、この木を園丁する父のことを考える時、私はいつも創世記のきれいな文章を思い出します。

「神はご自分のつくり出されたすべてのものを眺めわたされ、これをよしとして満足された」旧約聖書をよくみて下さい。神が人間の栽培者だということは、人間の歴史の最初のページに出ています。

「その時、神はアブラハムにおおせになった。おまえの地と、おまえの故郷と父の家を去って私が示す地に行け。そこで、アブラハムは主に命じられたとおりに出発した。75歳であった」

よい実を結ぶためには、自分のところから出なければなりません。

続いて、出エジプト記を読んでごらん。モーセに率いられてエジプトを出た神の民は、40



説教するベロー神父

年もの間、砂漠の生活してたんですよ。神も人間も大変でしたんです。人間がすぐに忘れてしまうものだから神はいろいろな苦しみや災いをもたらして人間を戒め、ご自分が蒔かれたぶどうの種から沢山の芽が出るように導きました。

その後、イスラエルの王やダビドのような人が現われてこの木に肥料を与えたり、刈りこんだりしましたんですね。

しかし、人間が万全を尽してぶどうの木の下で壺をもって待ちうけていても、うらなりの実しか出来ないということもあります。

今日の福音にうたわれているように、なぜイエズスが神のまことのぶどうの木なのでしょう？それは、イエズスが父のご意志にかなうものだったからです。聖書では、洗礼とご変容のところにそのことが書かれています。

さらに、新約聖書では、「カナの婚礼」のところをよくみて下さい。

結婚の愛の雰囲気の中にひとびとは、ふつうのぶどう酒を喜んでいました。しかし、宴の途中でぶどう酒が足りなくなりました。幸いでした。その時、イエズスが来られて新しいものを人間に与えたんですね。それは、神がまことのぶどうの木を、愛の雰囲気の中にもう一度つくろうとされていたんです。

イエズスがご自分の小さなグループと12人の弟子たちに伝えた、

「互いに愛しあいなさい」

これは、イエズスが弟子たちに与えた唯一の掟です。このイエズスの最後のメッセージを私たちはよく覚えておかねばなりません。そして、十字架につけられたイエズスが最後に云われた、

「父よ、すべてはなしとげられました。わたしの魂をあなたの手にゆだねます」のことばとを。

イエズスは、父の手の中にまことの実を差しあげたのです。ぶどうの木の目的は、ただ、実を与えることにあるのです。

この世で終るいのちの為にではなく永遠のいのちに至る実のなるぶどうの木の為に、実に沢山の人が働いて来ました。



奉納

住吉は50周年になっているんです。その間には沢山の司祭がこの教会の中で自分の身を捧げ、時々まちがいしたりしながらもベストを尽して働いて下さった。今、松本神父さまが住吉に植えられたぶどうの木を育てようとしています。私たちはよく、司祭、宣教師ということばを使いますが、イエズスの弟子は司祭である前に宣教師でなくてはいけない。彼らはみな神から与えられたぶどうの木を育てる仕事に責任感じてたんですね。

住吉の教会は本当に成長しました。私が来た当時(昭26)には、ミサにくる信者はわずか80人でしたんですよ。もちろん、こんな立派な聖堂もなく昔のバラックでミサ二つあげてました。

あれから、いろいろな苦しみの中に本当に成長しました。50年の伝統のあるこの場所は、何回も何回もいろいろな神父さまに肥料をいただいたり、刈りこまれたりして来ました。

これから、住吉教会はもっともっと豊かなものにしていかなければならないと思います。最後に、みなさんに一つだけお願いがあります。まさか、まさか、うらなりの実をひとびとに与えることがないように、かえって豊かな最高のものを与えることが出来ますように。

住吉の教会だけでなく、日本の教会だけでなく、宣教師や司祭だけでなく、すべての信者がいっしょに、あらゆる人に最高の最高の実をあたえることが出来ますように——。(説教要旨)

白い顔を紅潮させて、10分あまりの説教をベロー神父はそう結ばれたあと、祭壇の脇に下ってそっと額の汗をぬぐわれた。その頭髮の白さが語られたことばの重さと、互いのうえに過ぎた時間の長さを物語っているようだ。熱いものがこみあげて来て、私は胸のたかぶりをふっと吐いた。

その時、教会の前の道を、近くの神社からくり出した夏祭りのだんじりが勇壮なリズムを響かせながら近づいて来た。

戦後、パリミッション会から派遣された宣教師の第一陣として来日されたベロー神父の宣教の第一歩はこの教会からふみ出され、昭和43年、住吉教会が日本の教区の司牧区に委ねられるまでの18年間、エネルギーに働かれた。

その足跡は、星の園幼稚園の設立、現聖堂建設、ルルドの設置など、教会50年の歩みの中でもゆるがせにできないものばかりだ。その上、当時を知る人々の心の中には、今なお消すことの出来ない数々の思い出を残している。



聖変化

このたび、記念誌編集の為の取材に歩いていて、私は方々でそれを感じた。

時代の推移と共に、きびしいパリミッション会の会則も書きかえられ、各国に派遣された宣教師にも一時帰国が許されるようになり、来口いらい10年ぶりにフランスに帰られた時、ベロー神父には故国の人々の話すことばが瞬間ききとれなかったという。

また、長年の日本の生活習慣が身についてしまって、玄関先で靴をぬいで、郷里の人々の好奇心をかりたて笑いをまきおこされたというお話が「すみよし」に載っていたが、思わず笑った後ですこし悲しくなる話だ。

ひとしきり附近をねり歩いたあと、次第に遠ざかっていく祭り囃子を耳で追いながら私は思う。生れ故郷を捨てて、風俗や習慣のまるでちがう異国に渡来して、父なる神のご意志にしたがって生きようとされる宣教師が、一人の人間として生きるうえで犠牲にしているものが想像以上に過酷なものだということ。

ベロー神父の話される日本のことばは、決して流暢とはいえないが、メモを片手に説教されるのを聞いていると、直接のかかわりをもっていない私のようなものでも、何かをしないではいられないような気になってくる。

それは、きっと、神父さまの心の中に、神さまへの愛が激しく燃えているからだろう。

さて、それから、

「私たちがまことの福音を生きぬくものとなり、み業をなしとげる為の協力者となることが出来ますように」

という安田大司教の短い祈りにつづいて、教会の活動体である各会の代表が一人ずつ出て、共同祈願を唱え、ヨゼフ会、婦人会、レジオ、青年会、日曜学校の代表者によって、50周年をかたどった5本の大きなろうそくに火が点された。

この日を迎える為に、稲田神父、松浦神父を中心に実行委員会が結成され、部分集会、全体集会が何度となく重ねられ、4月には、両神父の転任というハプニングにも見舞われながらも、ようやく迎えた日とあって、安田大司教を無事にお迎えし、祭壇がいっぱいになるほどの神父さま方、駆けつけて下さったシスター方の祝福が受けられることで、式典の初めに覚えた緊張がいつの間にか、安堵にすりかえられている。(中略)



十字架を先頭に退堂



侍者会の面々
御苦労さまでした

午後3時

よろこびと感謝と祝福のうちにミサは終り、引きつづき50周年記念式典が行われた。

先唱者から式典の司会者にバトンタッチされ、安田大司教の祝辞をうけた。ひと言、ひと言かみしめるように静かに話されるおことばは、新たな一步をふみ出そうとする教会のみんなの指標になるほどの示唆と思いやりに満ちていた。

つぎに教会を代表して千葉健吉氏が答礼に立った。

「50年前、パリ外国宣教会の手によってこの住吉の地に新しい教会が誕生いたしました。いらい半世紀、戦中、戦後を通して苦難の道を歩んで来ましたが、今日こうして私たちは50周年の晴れの日を迎えることができました。

しかし、この50年の歴史の中には沢山の方々の祈りと犠牲があったことを、私共は決して忘れるものではございません。

教会50年の歩みをささえて下さった多くの方々への感謝をもってこの日を祝いたしたいと思います。いよいよ明日から私共は次の時代へ向って又はばたいていきます。明日の住吉教会をつくるのはもちろん私たちの手にかかっております。

どうかみなさま、よりいっそうのお祈りとご援助をお願いする次第です。」



ミサを終え幼稚園の運動場に集まって先ずは「乾杯!」



「住吉教会、バンザイ!」

そして、最後に、主任司祭として着任されたばかりの松本神父が、お礼のことばを述べられた。「今日、ここにお集り下さった安田大司教さまはじめ、神父さま方、シスター方、ご来賓の皆さま、そして、信徒のみなさま、有難うございました。

これで私たちも次の百周年にむけて力づくよく歩むことができます。特にベロー神父さまは、私のお父さんみたいな方です。只今、お説教を聞きましたし、心からミッション会の魂を今日、私はうけつぎました。この教会でイエズスさまのみ心、イエズスさまのふかいみ心の内に信徒のみなさんと共に祈りを通してがんばって行きたいと思います。

ベロー神父さまは、来月、休暇で故国へ帰られると聞いています。どうぞ、フランスへお帰りになられたら、ミッション会の神父さま方にご報告して下さい。

稲田神父さまのあとを引きついだ私も頑張りますので、どうか祈って下さいとお伝え下さい。ご受難会の松浦神父さまも短い期間でしたが大きな力を与えて下さいました。シスター方もいつも祈って下さってます。本当は陰で一番ふかく祈って下さっています。これからもどうぞよく祈って下さい。

とにかく、同じやるなら喜びの教会にしていかなければマイナスですから、私は楽しみながらやっていきたいと思います。ですから、みなさんもどうぞ細かいことにくよくよとらわれないで楽しんで下さい。

イエズスさまが、住吉の教会に私をつぎ木して下さいましたのですから、きつとうまく導かれると思います」

午後4時。

垂れこめた曇り空から一つぶ、二つぶ雨が落ち、降るのかと思うとぷつぷつ止んだ。

園遊会場にあてられた幼稚園の運動場ではテーブルにいっぱいのご馳走を囲んでなごやかな歓談がつづいた。(後略)(文中敬称略)

編集後記

7月の終りになってようやく編集を完了いたしました。前主任司祭の稲田神父さまとともにプランをたてはじめてから1年になります。この一冊をみれば、住吉教会の50年のあゆみが一目でわかるような本をつくりたいと大きな目標をかかげてスタートしました。しかし、一口に50年といってもそれは途方もなく長くぼう大な時間の集積でありました。

一方にプライベートな仕事をもちながら、その合間に資料あつめや取材に歩くにはおのずから限界があり、複雑かつ多岐にわたるその道筋を辿るだけで立往生すること数回。ついに力およばず発行が大幅に遅れてしまいました。深くおわびいたします。

5月の発行予定が8月になった3ヶ月間の遅れは、ダイナミックに息づいている歴史をすでに止めている時間としてとらえていたところに誤りがあったのかもしれません。ともあれ、今すべての作業を完了しようとしてふりかえると、イエズス・キリストの名のもとに結びあわされて来た人と人との出会いのあとが銀色に光る一筋の道として浮かび上って来ます。

鈍い光の反射の中で少しずつ分って来たことは、教会の歴史を辿るということは、人間の出来ごとの中に神がどのように働かれたかを問うことであつたのではないかということでした。

この記念誌がみなさまのお手元にとどくのは8月になりますが、世界を大きく変えた戦争が終って今年は40年目。今日、戦争を知らない世代が人口の過半数以上を占め、毎年夏がめぐってくるたびに各地で反戦、反核のつどいが開かれています。

私たちが主とおおぐキリストの十字架の死をはじめ、地上に平和をもたらすためにささげられた多くの犠牲を思うとき、それらはすべて誰かの未来のための無償の奉仕であつたことに改めて気づかされるのです。

教会創立50周年を機会に、風化しかけた記憶のヒダにスポットライトが当てられたわけですが、さて、知り得たことをどうするかが今後の課題として残ります。ここまでくると、「過去を知ることは、未来に責任をもつことです」と云われた教皇ヨハネ・パウロ一世の雪の広島平和公園でのあのメッセージがつよく迫ってくるようです。

この一冊の本が出来上るには、浅井敏正氏をはじめとする、すみよし編集部の方々のご尽力がありました。多くの方々のご協力と励ましによって支えられましたことを心から感謝いたします。なお、ご提供いただいた写真、資料を全部収録しきれませんでした。教会の資料として長く保存したいと思います。

住吉カトリック教会 50 年のあゆみ	
昭和 60 年 8 月 15 日	
編 集	50 周 年 記 念 誌 編 集 委 員 会
発行者	松 本 武 三 神 父
発行所	〒658 神戸市東灘区住吉宮町 2-18-23
	住 吉 カ ト リ ッ ク 教 会
	T E L . 0 7 8 - 8 5 1 - 2 7 5 6